

〔編集後記〕

今回の編集後記の執筆を担当するにあたり、学術誌の査読について考えてみた。

医科学の世界では（他の科学領域も同様だが）、新たな研究成果や知見、あるいはそれに対する意見や反論などは査読という審査を受けた上で、論文やレターという形で学界や社会に向けて発信される。学術誌は科学者と他の科学者や社会を結び、最新の知見を共有する場であり、議論を展開する場であると言える。そしてその学術誌の質を担保しているのが質の高い査読であるの言うまでもない。

昨年末の *Science* 誌に、失礼な査読をする査読者がいて害になっているという記事が掲載された (Wilcox C. Rude reviews are pervasive and sometimes harmful, *study finds*. *Science*. 2019 ; 366(6472): 1433.). それによれば、1100人以上の科学者を対象としたある匿名のアンケート調査では、過半数の回答者が”unprofessional”な査読を受けた経験があると回答していた。「質の低い」査読には明らかに専門領域外の者によるものや、品位を欠く言葉を並べるものがあったらしい。またそのような失礼な査読を受ける可能性は、女性や非白人でより高かったという。

また、これも昨年出された報告だが、若手研究者を対象とした調査では、約半数の回答者が co-review の経験があると回答している（要するに査読のゴーストライター）(McDowell GS et al. Co-reviewing and ghostwriting by early career researchers in the peer review of manuscripts. *eLife*. 2019 Oct 31;8. pii: e48425). これら若手研究者の大多数はこうした経験は自分にとって有益だと回答しているが、査読者には守秘義務が課されていることを考えれば、これは明白に非倫理的なことである。

納得のいかない査読を受けた経験は、この駄文を読んでもくださっている方々の中にも多いのではないだろ

うか。自分自身を振り返っても、単なる難癖としか思えないものや専門知識の欠如があからさまに読み取れる査読を受けた経験が何度かある。かつて留学から帰国して新たな論文を執筆し、シカゴ大学のメンターによる綿密なチェックも受けた上で投稿したが、「英語が練られておらず不正確なので、native speakerに直してもらえ」というニュアンスの査読コメントが返ってきたことが複数回あった。最初の時には困惑してかつてのボスに伝えると、激怒した彼はすぐさま Editor に電話を入れて、自分の話している英語がわかるか？と皮肉たっぷりに抗議してくれたらしい。それ以後はそのコメントは無視して、おとなしく native speaker に新たにチェックしてもらいました。と reply に一言加えるようにした。実際には特別何もしなかったが。

査読は単に論文を採択するかしないかという判定だけでなく、どうすればその研究をより質の高いものにできるか、より科学に貢献できるかを念頭にアドバイスをを行う教育的側面を持つ作業である。しかしながら、査読を引き受ける側にとっては、多忙な業務や研究のさなかに、ボランティアとして査読作業に時間を割くのは決して「お安い御用」ではない。おかしい査読を防ぐためにも、また誠実な査読者の努力に報いるためにも、査読者に対する評価のあり方は考える必要があるし、若手研究者が査読のスキルを上げるための教育機会も必要だろう。査読が完了し、採否が確定したのちに査読者の名前も公開し、査読作業にも一定のクレジットを与えるという方法は、査読者の業績につながり、査読者によるアイデア盗用のような非倫理的な行動を抑止し、査読全体の信頼の向上にもつながるように思う。

(編集委員 櫻井 晃洋)